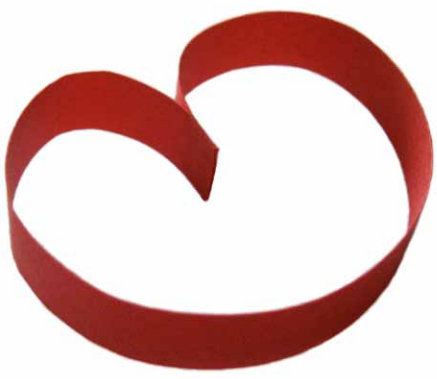


ノウゼンカズラはアイゼンカツラ。まったく別の植物なのに、ずつと仲間だとももつていた。きつかけは『愛染かつら』、ふるい映画だったか、ドラマだったか。みたことがないのだけれど、雰囲気だけは、気配としてかんにしていた。メロドラマ、悲恋のようなハッピーエンド。カツラの木とカズラなのに。だから夏、人のぬくもりのような花の色、空からふりそそぐように、ノウゼンカズラが咲いているのを見るたび、しらないのになつかしい、恋物語を連想するのだった。ツルをからめた姿は、どこかよりそうような、面持ちだったから。

カズラはクスともよむ、そのツルをのぼして、また別の、今度はあながち、間違いいはない（かもしれない、物語をおもう。（恋しくば尋ねて見よ 和泉なる信太の森のうらみ葛の葉、葛の葉狐と信太（安倍晴明の両親、こちらも、又聞き程度にしているお話だけれど、そんなツルを糸にして、物語を綴じてゆく、そこには秋の七草のクスも、入りこんでくるだろう。青あざのような痛みの色、からまって、花の織りなす絵巻です。ふだんは、しまわれて、でもカズラをみるたびに、

クスのツル、音から、また勝手な連想をしよう、ツルの思返し、異類婚。もはやカツラの木ははずさない。ただエクスだけを、そこに残すことは可能だろうか。看護師が狐とかきなりあい、ツルとなって、わたつてゆく、悲恋が苦難のすえ、ハッピーエンドとなって、連想が恋を追うのだろうか。訂正してもなお、ノウゼンカズラは恋の狐だ、メロドラマだ。からみつくツル、カズラが染めた愛で、青いあざの痛みも癒えるさ。うらがえつて、つらなつて、恋がとぶ。



ユートピアン
二条千河

冒険者たちが見当はずれの地名でこの島を呼ぶのを私たちは笑って受け入れた。出鱈目の地図を付けて狂ったコンパスをかざしてともかくひとつのゴールにたどり着いた。夢追人たちの夢を壊さないために命がけの航海の末、

本来のゴールがどこにあったかなんてもはやどうでもいいことだ。彼らが満足げに帰っていつてからというもの出鱈目の地図は世界中に広まって次々と新たな旅人がやってきては見当はずれの地名でこの島を呼びその地名に由来する呼称で私たちを呼ぶ（たとえばここをユートピアンと呼ぶなら私たちはユートピアンと呼ばれる道理だ）夢追人たちの置き去りにした夢は日に日に私たちの現実を侵蝕して本来の地名が何だったかなんてもはや誰も思い出せない。

あるいはこの島にも私たちにももともと名前などなかったのかもしれないともかく今は安全な航路が確立して地図は正確で地名も正当でその地名に由来する呼称が辞書に載る現実を私たちは笑って受け入れる。

ところでコンパスは相変わらず狂ったままなのだろうか

鳩と時計
酒見直子

子供時代を追い出されて大人になりました子供の頃は腕時計に憧れて左腕に描いて今何時？って遊んでいたの大人になつて時計が買えるようになってうれしかったのは最初の頃だけ今ではおしゃれな手錠に見える今日は大人が心底嫌になつたから電波時計を机の隅に置いて油性のペンで右腕に時計を描く

駅でおばあさんに「今何時ですか」と聞かれたから右腕をちらりと見ながら「腕時計の」十一時頃ですかね」と言ってみる

会社から電話が掛かってきて「出勤日ですよ」と言われたから「心時計で」休日になります」とすこんでみる

コンビニでコインパンを買って公園のベンチで半分を鳩にやって半分を食べている

群れから離れた鳩がいるあまり遠くへ飛べないのかもしれない右の羽が抜けかけているコインパンを少し大きくちぎって投げてやる

尋ね人は何処へ
平井達也

少し前までは新聞に尋ね人の広告が載っていた。「全て解決した。安心して帰れ」最近はずつかり見かけなくなった。帰つてよいのだ、と呼びかけられることもないまま、尋ね人たちは三面記事の行間を夜毎さまよい歩く。

誰かがぼくを探しているかもしれない。そう思うことも少なくなくなった。ときどき尋ねられて答える偽名に、今では本名よりも親しみを覚える。偽名で新聞販売店に住み込んでいたこともある。何が解決しないのか郵便受けに新聞が溜まり続ける家にも、律儀に配達していた。

ふと新聞に広告を出そうかと思う。「その後どうですか。そろそろ帰つていいですか」広告に気づくだろうか。末尾の名前がこのぼくだとわかるだろうか。今さら帰れないのはわかっています。でも、帰つて出たりユックはまだ手元にあります。

帰つてこいと呼びかけてほしい夜、今でも空のリュックを背負つて歩き回つてみたりする。

憧憬論
たなかあきみつ

有働さんのボエジーに寄せて

艶めく鴉の羽の漆黒には首導犬としての雪が色彩的に最適だとしたら削がれたパンの耳のキャンパス系暖色にはオリーフの実が寄り添いやおら停泊するだろうあちこちの耕作放棄地の低空に滞留する無風がじりじり雪辱を期す例の《至高の灰色》にはBlissweedの面義的ふててしまがヒューナー詩の古生物学的一節が埃のエデンに乱雑に放置してありそれはなればなれに介入する光の生傷O・ダルクによればエレナ空城の《稲妻のダンス》あるいは勢いを増す濁水であれサイレン抜きダムからの放流であれ濁流による傷だらけの河床だが灰色のごろごろ大きな石ころだらけ（はるか遠足先の赤目四十八滝の石のごろまぐ渓谷の銀灰色のフィルムを参照のこと）記憶の泥流が途絶えてしまえば取り急ぎワセリンが顔面の変形部分に乗り上げて連綿のボクサーの切れた目蓋にも似ていつたは切れ長のキアロスクリロの暗渠に堆積している眼珠のデブリ前世紀のダンサーたちの肺のアスベストG線上で脂肪の不透明に重なるケイソン病に極力陥没しないようにとにかく眼帯を掲げないよう折からの無風のつづく後背地に折々の動物のはらわたを扱いたような雑色という色はない

MOZART版《業興の時》集成よ雑色とりどり以外の酔いどれ草は生えず雑色と多彩はそもそもトトロロジックに紙一重だがA・サヴィニオ太陽の舞姫イサドラを地中海のとりわけきらめく多島海の迷宮に召喚せよ

étude 四肆舞 90/91
池田 康

〔90〕満月の夜が三日続いたあとぼくらは旅にでかけた痴呆の荒野は果てなく広がりはくらの旅は世界を制覇した

ぼくらのリーダーを呼んだ

ぼくらの一人が去り

ぼくらの言葉が悲しき

森は行方不明になり

ぼくらは互いの名前を忘れた

月が隠れるとぼくらは旅をやめ

森の奥に墓を建てた

墓は死をうたい

ぼくらのリーダーを呼んだ

満月が戻つてきて

ぼくらはまた旅に出かけた

満月は百日続き

ぼくらは狂つた月を路銀とする

〔91〕この世があるというオカルト言葉がつかえるという魔法もの形が見えるという神秘どこにでも行けるという奇蹟しかしどこにでも行けるは幻想ものが正しく見えるなんてあり得ない言葉は嘘ばかりつく魔物だこの世はいつなくなつてもおかしくないそれでいい

これはオカルト

ごちそうを食べて幸せになるのもオカルトキスをして気絶するのもオカルト

明日の天気予報をやっているからきつと明日は来るのだから

オカルトは真面目一筋に地球という回り舞台をメンテする



紫陽花便り
神泉 薫

きみから受け取った紫陽花便りを今朝ひも解いてみた

朝日に透かして 額で読み取る

赤 青 紫の花びら

ひとつひとつのことばの欠けら日々という土壌に染み通つたベシミズムをいつのまにか吸い上げた

光に向つて花開くのは そのかなしみを癒すため葉に宿る一匹のかたつむりは

真のかなしみを知る賢者

ゆつくりと導く線を みどり葉へと描いてゆく

そのリズムで そのやさしきで

ふいにまなざしを落とせば

ささやかな喜びが わき起こる

ありのままの歩行がひろく たおやかな余白はまだ丸い地球のあちこちら

赤道をへめぐり 大陸を見晴らす

未来予想図を描きながら

白いキャンパスシューズが地を蹴る予感

大空からこぼれ落ちるしずくを

小さな紙飛行機にして飛ばす

乾いた夏は さあ これから

étude 四肆舞 90/91
池田 康

〔90〕満月の夜が三日続いたあとぼくらは旅にでかけた痴呆の荒野は果てなく広がりはくらの旅は世界を制覇した

ぼくらのリーダーを呼んだ

ぼくらの一人が去り

ぼくらの言葉が悲しき

森は行方不明になり

ぼくらは互いの名前を忘れた

月が隠れるとぼくらは旅をやめ

森の奥に墓を建てた

墓は死をうたい

ぼくらのリーダーを呼んだ

満月が戻つてきて

ぼくらはまた旅に出かけた

満月は百日続き

ぼくらは狂つた月を路銀とする

〔91〕この世があるというオカルト言葉がつかえるという魔法もの形が見えるという神秘どこにでも行けるという奇蹟しかしどこにでも行けるは幻想ものが正しく見えるなんてあり得ない言葉は嘘ばかりつく魔物だこの世はいつなくなつてもおかしくないそれでいい

これはオカルト

ごちそうを食べて幸せになるのもオカルトキスをして気絶するのもオカルト

明日の天気予報をやっているからきつと明日は来るのだから

オカルトは真面目一筋に地球という回り舞台をメンテする